**補完性原理（Principle of Subsidiarity）とは何か。**

**1931年発行のローマ教皇回勅「クアドラジェジモ　アンノ」の７９節**

**20081101　和訳　ｂｙ　齋藤旬　rev4**

**79.** As history abundantly proves, it is true that on account of changed conditions many things which were done by small associations in former times cannot be done now save by large associations. Still, that most weighty principle, which cannot be set aside or changed, remains fixed and unshaken in social philosophy: Just as it is gravely wrong to take from individuals what they can accomplish by their own initiative and industry and give it to the community, so also it is an injustice and at the same time a grave evil and disturbance of right order to assign to a greater and higher association what lesser and subordinate organizations can do. For every social activity ought of its very nature to furnish help to the members of the body social, and never destroy and absorb them.

歴史の多くの事例が証明しているように、社会的諸条件の進展の結果、以前には小さな団体が引き受けていた多くの事柄が、今日では大きな団体でなければ実行不能であることは、確かに事実である。しかしながら、もっとも重要な原則、即ち、決して無視されたり変更されたりしてはいけない、不動、つまり社会哲学において揺るぎない原則がある。それはつまり、個々人が彼ら自らのイニシアチブと産業によって完遂しうる事柄を、彼らから奪い、コミュニティーに与えることは重大な過ちであるということ、つまり、小さな下位組織が為し得る事柄を、大きな上位組織にアサインすることは、不正義であり、同時に権利秩序の攪乱であり深刻な悪そのものであるという原理である。なぜならば、全ての社会活動の本来の目的は、社会という”体”の成員に支援を与えることであり、決して彼らを破壊したり飲み込んだりすることではないからである。

20210906追記（感想）：

the principle of subsidiarityの一般的和訳は補完性原理だが、「**補助性原理**」とした方が本来の意味を表していると思う。本来の意味は：

「**大きな上位組織（a greater and higher association）は補助的（subsidiay）である**」。

だからだ。これは普通の表現、例えば「subsidiary company = 子会社、系列会社」と大きく異なるので戸惑うが、まさにこのコペルニクス的発想の転換がこの原理の最も大事なところ。つまり「**小さな下位組織（lesser and subordinate organizations）こそメインな存在**」という所がかなめ。「いちばん小さくされた者の一人にしたのはわたしにしたのである（マタイ25・40）」の発想が背景にある。

　「補完性原理」と和訳してしまうと、「小さな組織は不完全だから、大きな組織が補ってあげる」のような印象を与えてしまう。これでは、peopleを「自身の贖いのａｇｅｎｔｓ」にすることにならない。誤解を招く和訳だ。